

Title	三田哲学と私(2)
Sub Title	On Mita Philosophy Society and Myself
Author	大江, 晁(Ohe, Akira)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1990
Jtitle	哲學 No.91 (1990. 12) ,p.57- 58
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	文学部創設百周年記念論文集I Essay
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000091-0057">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000091-0057</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 三 田 哲 学 と 私

名誉教授 大 江 晁

三田哲学会も戦争の影響を大きくうけたと思う。われわれの学生時代には三田哲学会の集まりが開かれていた記憶はほとんどない。かろうじて思い出すのは、あるとき船田三郎先生につれられて、現在女子高の建物のある旧徳川邸の一郭で行なわれた南博氏の講演を聞きにいったことぐらいである。当時氏はアメリカから帰られたばかりで、幼稚舎出身ということで話をされると、船田先生からうかがった。これが三田哲学会の正規の会合であったのかどうかは知らないが、関連する催しのひとつだったのではないかと思う。

沢田先生の復員後学会活動がしだいに再開されるようになったと思うが、助手になってから辟易させられたのは、例会の準備と『哲学』の編集であった。学会のシステムが確立しているとはいえない状態であったから、いつでも哲学科の哲学専攻のものの仕事とされる傾向があるうえに、幹事といった職名も任期もきまっていなかったからである。とりわけ、事務にきびしかった橋本孝先生に小言をいただきながら悪戦苦闘した。橋本先生は懇親会のメニューにも目を通されたし、お酒を飲まれなかったからキリン・レモンを注文するのを忘れては大変であった。

この状態にたまりかねて三田哲学会の事務の近代化をはかったが、それに手を貸してくれたのは三雲夏生、佐野勝男両氏で、昭和30年代なかばである。それによって、ほぼ現在のシステム、つまり各専攻のスタッフによる持ち回りと任期の設定とが確立された。義塾創立百年の記念論文集の編集はちょうどその頃の仕事で、わたしが担当せざるをえなかったから、年配の先生の原稿集めには苦勞した。催促して怒られることもしばしばであ

ったから、近代化を計った心情も理解していただきたい。

大学紛争後、学会活動が昔に比べるとかなり変則的になった。学科の編成替え、学生増、学問自体の専門化の傾向といったことに理由が求められようが、スタッフの持つ心構えもひじょうに大きく作用しているように思う。文学部全体に一種の遠心力がはたらいて、学部活動がなにやら拡散傾向を呈している印象をもつのはわたしだけであろうか。この辺で懇親の意味もふくめて定期的な学会活動の維持にもう一度努力してみる必要があるのではないかと考えている。三田哲学会にかぎらず、学会活動というのは一度途切れてしまうと、回復は不可能ではないまでも、意外に困難なものだからである。文学部開設百年を機に、初心に立ち返って三田哲学会の発展を計っていただくことを、とくに若いかたがたにお願いしたい。